

最後に

15回目になる支援活動も予定通りに実施し、無事終了いたしました。現地の人々からはたいへん喜ばれ、私たちの活動に対する期待感を肌で感じました。これもひとえに、日本で協力頂いている数多くの皆様方の、真心のこもったお力添えの賜物であります。誌上を借りて、厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。

この活動は小さい輪ではありますが、タイと日本の信頼関係の醸成につながれば、望外の喜びであります。この先も、さらなるご支援・ご協力をお願いし、タイ支援活動の報告といたします。ありがとうございました。

最後に会計報告を致します。

会計報告 (12・8 ~ 13・10)		単位 円	
収 入		支 出	
奨学金寄付	122,000	現地活動費	368,677
その他寄付金	133,000	印刷費	25,000
リサイクル売却益	91,410	通信費	20,350
衣類送料寄付金	16,500	車両費	58,390
葛城山麓を守る会7	100,000	葛城山麓活動費	8,000
天理教本部助成金	100,000	雑費	80,780
前年度繰越金	15,614	次年度繰越	18,127
合計	579,324	合計	579,324

※ 1パーツ = 3,000円として計算

現地活動費内訳

奨学金	100,000	学用品(ノート、鉛筆)	18,225
ゴムゾーリ代	20,430	滞在費	29,612
交通費	41,930	その他(手土産など)	58,480

差引残高 18,127 円 (次年度に繰り越し)

SEP



第24号 13・11・21発行
代表 山本宏文
奈良県葛城市竹内290-2
TEL & Fax (0745) 48-5174

Saiwa Education Program(サイワ教育プログラム) E-mail saiwa-yokiyusan@kcn.jp

第15回 タイ支援活動

毎年6月に実施しているタイ支援の活動、今年は10月29日からの実施となりました。本年の活動は、いままで奨学金を提供していた子どもたちも成長し、就職したりあるいは結婚したりして、地元を離れて暮らしている。その元奨学生の子たちを訪ね、再会し、近況を聞いて激励したことが、新しい取り組みでありました。

さて、本来の支援活動は、タイ北部チェンライ県メーヌオイ郡にあるファイマサン小学校を中心として、奨学金や学用品などの支援を実施しました。支援の内容は、同小学校の子どもたち30名へ奨学金を支給し、300名弱の全校児童には学用品(ノート、鉛筆、消しゴム、定規)、ゴムゾーリの配布などをいたしました。そしてトイレの修理代として3万パーツ(1パーツは約3円)を寄付しました。さらに、他の小学校も訪問しサッカーボールを手渡し、幼稚園では子ども服の配布をしました。

なお、今回の参加者は、山本宏文(代表)、山本るみ子の二名でした。以下、その時の模様を紹介し、この活動にご支援・ご協力下さっている皆様方への報告といたします。

現地まで

10月29日、関西空港午前11時発タイ航空(TG623便)で、バンコクには現地時間午後2時40分ごろ到着しました(当地との時差は2時間マイナス)。そこで3時間半ほど待機し、午後6時25分発のTG140便でチェンライへと向かいました。午後7時45分着。出迎えのアヌチット氏と合流ののち、近くの食堂で夕食をとりました。私たちは久しぶりのタイ料理に舌鼓、おいしさを満喫したのち常宿にしているセンプーホテルへと向かいました。

タイの物価も上がって来て、去年は、一泊650パーツだったのが今回は700パーツになっていました(ここでは一部屋いくらの値段になっています)。あまり良いホテルではないのでバスタブなし、ときどきお湯がぬるくなったりしましたが・・・。

支給品を買い求める

30日朝から、今までも利用している履物問屋へと向かった。朝早い8時過ぎであったが、街は活気に満ちて人も車も多かった。すでにたくさんの車が止まっていて、めざす問屋の前にもすでに他の車が止めてあった。私たちは、アヌチット氏が手配してくれたレンタカー（ガソリン代別で一日1,500バーツの借り賃）を近くに止めておくよう指示し、小学校で配布する履物（ゴムゾーリ）を、大小取り混ぜて300足買い求めた。ここタイでは、毎年物価が上がって来ているように思われる。というのは、ちなみに昨年のゴムゾーリの値段は4,900バーツ、それが今年は6,800バーツである。そのあと、近くにある大きな文具店に行き、ノート、鉛筆と、さらに今年は消しゴム、30cmの定規を買い求めた。

サッカーボールの配布

午後から、知り合いの校長先生（プラパット校長）がいるバン・パートンガン小学校へ行く。この学校は、チェンライ県メーソイ郡の郊外にある、先生8人、児童81人の小規模な学校である。先生方の人柄であろうか、規模は小さいがきれいに整頓されていて、広い敷地内にはブタ小屋、にわとり小屋、さらに畑なども広がっていた。これらは、それを売って学校の経費に充てるために飼っている。運動場は一面芝生が植えてあり、サッカーゴールも常設されている。

校長のプラパット氏は、タイ南部出身の気まじめな方で、数年前に観光で日本に来たことがあり、その際私どもの家で滞在されている。そういう関係で、旧知の先生でもあり、今回の訪タイにあたって、「ジョイアスボール」という名古屋に本拠をもつ団体から譲り受けたボールを10個、当校に寄付した次第である。タイの子どもたちは人懐っこくて、私たちがボールをもって現れると、どこからともなく集まってくる。そしてみんなニコニコとした笑顔を振りまいている。手渡したボールで早速広い運動場で蹴りあっている姿に、それを持ってくる時の疲れも消え、あゝほんとうによかった、と感激した。



（ サッカーボールを手に ）

もと奨学生の家へ

昨年までは、彼女らの住んでいる自宅へ出向き、奨学金を手渡していた

他の学校二校を訪ねる

一つ目は、以前日本に来る予定であったが中止された女の先生がいる学校で、授業中であったがそれを中断し、私たちが暖かく迎えて下さった。そして、ここへ来る途中で買っておいだお菓子をこの教室の全員（25人ほど）に渡してもらうよう先生に手渡した。

ここで私は変わった体験をした。6年生と思われる児童の教室であったが、私が教壇に立って算数の問題を出した。算数であれば、言葉が分からなくても通じると思ったからである。それは、3分の1×4分の3はいくらか、といった類の問題である。手を上げて答えてくれた子に、「はい正解」と言ったところ、横からアヌチット氏がその子に100バーツを渡した。これに私はびっくりした。とても日本では考えられないことだ。授業をしているなかに、突然外国人が割り込んでいくことも、その子たちに問題を出すことも、さらにテストに正解を出した子にご褒美としてか現金を渡すことにも。

二つ目に訪問した学校は、以前ファイマサン小学校に勤務し、今年転勤でこの学校に来た先生を訪ねてのことである。ここで私たちは昼食をいただいた。その時の体験であるが、食堂で昼食をすませた子一人ずつに、先生から5バーツを渡している。貰った子は、食堂内にある売店で自分の好きなお菓子を買って食べていた。これを見て、教育にもいろんな考え方があるものだと思った。

もと奨学生を訪ねて

一人はナルモンさん。彼女は今年結婚しバンコクに住んでいる。この人とはもう15,6年前からの知り合いで、以前チェンマイで同様の活動をしていた時からの長い付き合いである。私たちはバンコクに行き、そこで落ち合って主人ともども祝辞をした。

さらに、もう一人のもと奨学生ーティダラットさんにも会った。これは偶然ともいえるのだが、彼女は今年、ドイツの家具メーカーの会社に就職し、観光で有名なプーケット島に勤めている。いま新人の研修が2ヶ月間あって、たまたまバンコクに来ていたのであった。それで運よく私たちと会うことができたという次第である。

奨学金を支援していた人が、それぞれ立派に成人し、社会に出て活躍している姿を見ることができ、この活動をしている者にとって最もうれしいひと時である。彼女らに、しっかり頑張るとエールを送った。

ルバスで通学している。バスは、学校が月 4,000 バーツで契約し、子どもたちを学校への送迎をしている。父の仕事は農業で、仕事のない時期は日雇いに行き、日当 150 バーツをもらう。家は新しく、築 1 年で、それ以前は祖父の家に同居していた。まだ電線がないので、隣の兄宅から電気を引いて、蛍光灯を点けていた。電線を引くには 3 ~ 4,000 バーツ必要なので、いまは無理とのことだった。

4、スパワデー・ジャプックさん (小 1, 8 才の女の子)

4 軒目の訪問先でたいへん変わった話を聞いた。というのは、この子の母親 (34 才) の母方の祖父は日本人だということだった。この祖父は旧日本軍の兵隊さんで、ミャンマー (旧ビルマ) に住んでいたが、30 年ほど前に亡くなっている。旧軍人の娘である人は、連れ合いと共に今もビルマに住んでいる。時々ビルマに電話をするが、会いに行ったことはない。



(奨学生の自宅内部で)

【奨学金受給の条件】

奨学金の支給は先生方の相談によって決められているが、その条件は次のようになっている。

- 1、家が貧しい子
- 2、学習意欲がある子
- 3、先生の言うことをよく聞いて成績のよい子
- 4、学習に積極的な親の態度
- 5、上記を先生方が検討し、家庭訪問のあとに決定する

幼稚園へ衣類を届ける

ファイマサン小学校から近くにある幼稚園 (Ban Huai hki lek mai Preschool)。園長先生の名前は Walaiporn Pornthipworakul と言う。ここへは、2010 年 6 月にも行ったことがあるが、今回もそこを訪ね、日本から持ってきた衣類などとともに、ゴムゾーリを 4 ダース (48 足) 手渡した。そこにいる子は 3 ~ 4 才ほどで 40 人余りの子が保育されていた。



(衣類を渡した幼稚園)

が、その二人とも卒業した。上の子 (ティダラットさん、22 歳) は、ここから 1600 キロほど離れたプーケット島で就職し、下の子 (ポンサコーン君、18 歳) は近くのバイク屋さんで修理技術の見習いをしている。そんなわけで、ティダラットさんに会うことはできなかったが、お祖母さんと一緒に暮らしている男の子にあった。

彼の話によると、昨年 9 月から働きかけたが、いまはまだ見習い中とのことで、日当は 200 バーツ、それも勤務した日だけ、つまり日給月給ということである。勤務時間は、朝 8 時から 5 時終了が定時だが、ほとんど夜 8 時 9 時ごろになるということだった。

いまは彼らに奨学金を渡さないが、でもこうして立派に成長した姿を見ることが、私たち支援をしているものにとって、「これからも精一杯この活動を続けよう」と、実に勇気づけられる場面である。



(右端、ポンサコーン君)

フェイマッサン小学校へ

10 月 31 日、朝 8 時 30 分にホテルを出発し、私どもの活動拠点としているファイマサン小学校へと向った。30 分ほど走ったところでバンディット氏 (彼は元この学校の先生) を迎え、私たちは学校に行った。学校には 10 時ごろ到着し、懐かしい先生方の出迎えを受け、式典のつとめられる会場へ案内された。会場にはすでに全児童と共に、たくさんの保護者の方も来ていました。

贈呈式の様子

そこでお茶を出されたのち歓迎行事があり、ラフ一族という山岳民族の、男の子 8 人、女の子 10 人による「新年の踊り」が披露された。その踊りは日本でいう笙のような楽器を吹き、女の子は小太鼓のようなものを肩から吊るしてたたき、ツリーを囲んで回りながらみんなが踊るといふものだ。なかなかぎやかな踊りである。それに続いて、同じく山岳民族 (リソー族) 出身である校長先生自らも、「ナンタオ」という竹製の楽器 (これも笙に似ているもの) を吹きながら踊って下さった。さらにつづいて、女の子 4 人がエアロビクス体操のようなものも披露してくれた。彼女らはチェンライ県で二番目に上手いということらしい。

にぎやかな歓迎行事ののち、校長あいさつ、山本よりのあいさつ、そして奨学金の贈呈となった。このメッセージは、私が日本語を読み上げ、あと女の先生がタイ語で伝えてくれました。



(ラフ一族の衣装で踊る)

ファイマサン小学校のみなさんこんにちは。

私は日本から来た山本です。隣にいるのは私の妻です。

毎年、私は6月に来ていましたが今回は10月です。それは、5月に私の娘が子どもを産んだので、その頃は忙しくしておりました。なお、孫は男の子です。

さて、私たちは、あなた方の中の30人に奨学金を持ってきました。さらに皆さん全員にノート・エンピツ、さらにゴムゾーリなどを持ってきました。そして今回は、トイレの建築費として3万パーツを寄付しました。これらのお金はすべて、日本人たちが寄付してくれたものです。

なぜこのような活動をしているかという、皆さんがしっかり勉強し、大きくなって社会に役立つ人間になって貰いたいからです。

私は、またこの活動を支えて下さっている多くの日本人々は、あなた方が世の中の人々に喜ばれるような人間になってくれることを、心から期待しております。

奨学金は、先生から選ばれた30人の子どもたち一人ひとりに、私たちから一人1,000パーツを手渡しました。そのあと奨学生と先生そして私たちとの記念写真、奨学生代表による謝辞の言葉、さらに保護者代表のお礼の言葉などがあり、保護者からは、心のこもった手作りの品をいただきました。なお、児童全員への支援として、昨年まで実施していたゴムゾーリやノーと鉛筆に加えて、今年は新しく消しゴムと30cmの定規も渡しました。

引き続き、小学校のトイレの修理代金として30,000パーツを渡しました。これは昨年、学校側からから要請されていたもので、それまでのものは古くて汚いものでしたが、きれいで快適なものになり、みんな喜んで使っているとのことでした。

10時から始まった贈呈の式典も済み、私たちは学校で用意して下された昼食をいただいた。

タイ料理は、辛いとかの評判がありますが、ここで頂く料理は、一見中華風で、ほとんど辛くないものが多かった。このあたりの食べ方は、ご飯(いわゆる長粒米、タイ米)のうえにおかずをのせて食べるという方法です。日本のドンブリではなく、一口で食べられるだけの量のおかず、これをご飯の



(奨学生と先生と共に)

入っている皿にとり、ご飯とおかずを一口で食べていきます。おかずは、たとえば豚肉と野菜の煮込んだもの、グリーンカレー風のものなど、4、5品を出していただきます。



(贈呈品と共に)



(新装なったトイレ)

奨学生の家へ

昼食後、校長先生と女の先生の先導で、私たちは4か所の奨学生の家を訪ねた。

1、プシット・レーポくん(小3、13才の男の子)

第一の訪問先は、学校から車で数分のところだった。今までも報告したように、この地域は山岳民族が暮らすところである。赤土で坂道の周辺には、竹製、かやぶきの家(高床式家屋で下では豚や鶏がいる)が十軒ほどまとまって点在している。その一つの家で、彼プシット・レーポ君は母親(39歳)や兄弟たちと暮らしている。

まず家族構成は、父親(40歳)はいま山で仕事をしていて不在、母親は15歳で結婚し、5人の子どもを産んだ。ちなみに彼は三番目である。姉は仕事で家にはいなく、兄はチェンマイの寮からキリスト教系の学校へ行っている。下の子は母親と共にいた。先ほど紹介したように、住居は竹を編んだ家なのですきま風がはいり放題、暑い時期はそれでもいいが、これからは、夜から朝がたにかけて寒く、身体にこたえる時期になる。で、ふろ代わりのシャワーも水をかけているので、寒い時期ではきびしいものがある。家に上がって話を聞いていたが、部屋をぐるっと見回しても、私たちが普段目にする家具や家財道具などは、何一つ全くない。それはたとえば「時計」がないのである。どうして時間を知るのか、と聞くと、太陽の位置から判断すると話していた。

2、ユパポーン・アーサさん(小2、14才の女の子)

次は、近くに住んでいるユパポーン・アーサさんの家である。家族は、父(31才)と母(33才)、そして5人兄弟の3番目の子である。彼女が学校へ行くのが遅れたのは、一家がここに定住したのは2年前であった。父が家にいたのは、今日学校に行ったからだと話していた。仕事は、やはり農業で、主にコメ、トウモロコシ、落花生などを栽培している。



(奨学生の家)

3、ジャセー・ジャロくん(幼稚園児、5才の男の子)

私たちはいったん車に戻り、そこから少し離れた所にあるジャセー・ジャロくんの家に行った。父31才、母30才で、4人兄弟の長男である。この子は学校まで距離があるので、スクー